

 「物価が上がった」だけでは足りない

 上級〜一般教養レベル

インフレを見るなら、「価格」ではなく循環まで見る

ここまで私たちは、国内投資が増え、企業の売上や利益がどう動くかを見てきました。  
すると次に出てくるのが、

インフレ

です。

一般には、物価が継続的に上がっていく状態を指します。

ただし、

物価が上がった = 日本経済が復活した

とは言えません。

本当に見たいのは、

なぜ価格が上がったのか。

その価格上昇が、利益・賃金・消費・設備投資へつながったのか。

です。

---

 まず「値上げの理由」を分けて考える

同じインフレでも、理由はさまざまです。

原油や原材料が上がった。

円安で輸入価格が上がった。

人件費が上がった。

物流費が上がった。

需要が強くなった。

供給能力が足りなくなった。

つまり、

物価上昇という結果だけを見ても、経済の中身は分からない

ということです。

たとえば輸入物価だけが急上昇し、企業利益も賃金も伸びない場合、家計の負担が増えるだけになりやすい。

一方、需要が強まり、企業が適正価格を取れるようになり、その利益が賃金や設備投資へ回るなら、意味はかなり違います。

---

 でした。「適正価格」

企業が事業を続けるためには、価格設定が重要です。

原材料費。

電力料金。

人件費。

物流費。

設備費。

こうしたコストが上がっているのに、販売価格を長期間変えられなければ、利益率は低下します。

だから必要になるのが、

### **適正価格**

です。

ここでいう適正価格とは、

企業が**必要なコストを回収し、将来の投資や賃上げに必要な利益を確保できる価格**

であると同時に、

**顧客が価値に見合うと判断して受け入れられる価格**

でもあります。

この両方が必要です。

---

### **価格転嫁ができるか**

ここで重要になるのが、

#### **価格転嫁**

です。

原材料費が 10% 上がった。

物流費が 5% 上がった。

人件費も増えた。

この上昇分を販売価格へある程度反映できなければ、企業の利益は圧迫されます。

しかし、

#### **コスト上昇分をどこまで価格へ転嫁できるか**

は企業によって違います。

代替品が多い商品。

価格競争の激しい商品。

取引先との力関係が弱い企業。

こうした場合は値上げが難しい。

逆に、

技術力が高い。

品質に差がある。

他社で代替しにくい。

ブランド力がある。

こうした企業は、価格を維持しやすい傾向があります。

つまり、  
価格転嫁力は、その企業の付加価値や競争力を見る一つの手がかり  
になります。

---

 「安さ」で勝つ経済から「付加価値」で勝つ経済へ

デフレが長く続くと、

**値上げしないこと**

が競争力になりやすくなります。

すると企業は、

コスト削減。

人件費抑制。

海外生産。

効率化。

などで価格を維持しようとします。

しかしこの方法には限界があります。

材料も高い。

電力も高い。

人件費も上げたい。

その中で価格だけ据え置けば、企業の利益が細ります。

そこで必要になるのが、

**「安く売る」より、「高い価値を作る」**

という考え方です。

高い技術。

高い品質。

便利さ。

安全性。

独自性。

こうした付加価値があれば、

適正価格で売りやすくなります。

---

 **適正価格から「粗利」へ**

適正価格で販売できれば、

売上から原価を引いた、

**粗利**

を確保しやすくなります。

ここが非常に重要です。

価格が上がった。

でも原材料費がそれ以上に上がった。

これでは粗利は増えません。

だから、

### 価格上昇率

だけではなく、

### 粗利額・粗利率がどう変化したか

を見る必要があります。

企業が値上げできても、粗利率が低下しているなら、まだコスト上昇に追いついていない可能性があります。



### 利益から賃金へ流れるか

粗利が増え、営業利益も増えた。

次に見るのは、

### 賃金

です。

企業には利益の使い道がいくつもあります。

設備投資。

研究開発。

借入金返済。

配当。

将来への備え。

そのため、

### 企業利益↑ = 賃金↑

と自動的ににはなりません。

しかし日本経済全体として、

企業利益が伸びても賃金が長期間伸びなければ、

### 企業から家計へのお金の流れが細い

ことになります。

だから、

### 利益から賃金への波及

を見る必要があります。



### 名目賃金と実質賃金

さらに重要なのが、

### 名目賃金と実質賃金

の違いです。

名目賃金は、給料の金額そのものです。

たとえば、

30 万円 → 31 万円。

約 3% 上昇。

一方、物価が 5% 上がったとします。

すると、給料の数字は増えても、

**その給料で買える商品やサービスの量は減る**

可能性があります。

この購買力まで考えたのが実質賃金です。

だから、

**賃金が上がったかではなく、物価上昇を上回ったか**

を見る必要があります。

---

### 実質所得から消費へ

家計の実質的な購買力が増えれば、

外食。

旅行。

家電。

住宅。

サービス。

などへ支出しやすくなります。

つまり、

**企業利益**

↓

**賃金**

↓

**実質所得**

↓

**消費**

という流れができます。

消費が増えれば、今度は企業の売上になります。

ここでお金が企業へ戻ってきます。

---

### 「良いインフレ」を循環で考える

ここまでをつなげると、

私たちが探しているのは、  
適正価格で販売できる

↓

粗利が確保できる

↓

営業利益が増える

↓

賃金が上がる

↓

実質所得が増える

↓

消費が増える

↓

企業の売上が増える

↓

設備投資・研究開発が増える

↓

生産性・付加価値が上がる

↓

さらに賃金や利益が増える

という循環です。

これなら、

「物価上昇」ではなく、「所得と投資を伴うインフレ」

と呼ぶ意味が出てきます。

---

### ⚠ 反対に、苦しいインフレとは？

では反対を考えてみます。

輸入価格↑

↓

物価↑

しかし、

企業利益→

賃金→

実質所得↓

消費↓

となった場合。

家計は節約します。

企業の商品が売れにくくなる。

企業は設備投資を控える。

景気も弱くなる。

このような状態では、

**価格だけが上がって、経済の循環が細くなる**

可能性があります。

つまり、

**インフレの良し悪しは、物価上昇率だけでは判断できない**

のです。

---



**「教室不足」ともつながる**

前の区画で、

**人材・電力・建設能力・物流などが足りない**

という話をしました。

こうした供給制約が強まると、価格は上がりやすくなります。

しかし、

価格が上がる。

↓

企業に利益が残る。

↓

設備投資する。

↓

供給能力が増える。

なら、

**不足を解消する方向へ経済が動く**

可能性があります。

つまり、

**価格上昇が「もっと供給しよう」という投資の信号になる**

場合があります。

ここが重要です。

---



**生産性が上がれば、さらに違ってくる**

設備投資やAI、ロボット、自動化によって生産性が上がれば、

同じ人数でも多く作れる。

同じ時間でも高い付加価値を生み出せる。

ようになります。  
生産性が上がれば、  
企業は賃金を上げながら利益を確保できる余地も広がります。  
だから本当の好循環には、  
**賃上げだけでなく、生産性向上も必要**  
です。

---

 **日本復活を測るなら「物価」だけでは足りない**

インフレを観察するなら、  
消費者物価だけでなく、  
たとえば、  
**企業物価**  
**企業の粗利率**  
**営業利益**  
**賃金**  
**実質賃金**  
**個人消費**  
**設備投資**  
**労働生産性**  
などを一緒に見ます。

もし、  
**物価↑**  
だけでなく、  
**粗利↑**  
**賃金↑**  
**実質所得↑**  
**設備投資↑**  
まで同時に動くなら、  
経済の循環が変化している可能性があります。

---

 **また「お金の配管図」へ**

ここでも見るべきは一つの数字ではありません。

**価格**

↓

**粗利**

↓

営業利益

↓

賃金

↓

消費

↓

設備投資

という配管です。

途中でどこが細くなっているか。

そこを見る。

たとえば、

価格↑ → 粗利↓

なら、コスト上昇が大きすぎる。

利益↑ → 賃金→

なら、家計への波及が弱い。

賃金↑ → 実質賃金↓

なら、物価上昇に追いついていない。

こうして、

「日本経済は良い・悪い」ではなく、「どこで血流が詰まっているか」を見る  
のが今回の考え方です。

---

🌟 上級〜一般教養レベルのポイント

物価が上がった。

それだけでは、

日本復活とは言えません。

見るべきなのは、

適正価格

↓

粗利

↓

営業利益

↓

賃金

↓

実質所得

↓

消費

↓

設備投資

↓

生産性

です。

つまり、

**\*\*「価格が上がったか」ではなく、**

**「価格上昇が次の所得と投資につながったか」\*\***

を見る。

これが重要です。

---

 そして次の「？」へ

企業は利益を出した。

賃金も上がった。

設備投資も増えた。

では——、

**企業利益は、社員だけに流れるのでしょうか？**

株主へ配当される。

税金になる。

研究開発へ行く。

海外へ再投資される。

内部資金として残る。

いろいろな道があります。

ここから次は、

**「企業が稼いだお金は、誰のところへ行くのか？」**

という区画へ進みます。

そして、

**株を持つ人だけが得をしているのか？**

という少し難しい「？」へつながります。

 寄り道研究所

**NIGHT FLIGHT SPECIAL II 【国内編】**

 上級〜一般教養レベル解説でした。

 次の寄り道へ、ご搭乗ください。